

第 33 回支援連絡調整会議 議事録

日 時：2016 年 3 月 15 日(火) 10:00~12:00
場 所：米崎地区コミュニティセンター 集会室
出席者：19 団体 29 名（オブザーバー2 団体 3 名を含む）
進行：酒井（事務局）
文責：酒井、佃（事務局）

1. 事務局連絡（10:00~10:05）

➤ 平成 28 年度 支援連絡調整会議日程

1・2 月の調整会議で会議に関するアンケートをとったが、来年度は今年度と同様（名称・登録方法ともに変更なし）に継続する。会議日程は次第に記載。毎月第 3 週目の火曜日に開催予定ですが、前日が祝日の場合は第 4 週になりますのでご確認下さい。

➤ 活動報告および今後の活動や告知など（事前に共有いただいたもの） ※敬称略

高田大隅つどいの丘商店街／山本	○報告 3/12(土)クラウドファンディングセミナー@協働センター 市内事業者向けのクラウドファンディングセミナーを開催。 ○告知 6/5(日)商店街4周年記念企画。防災・減災をテーマに企画を実施予定（詳細は後日）。※飲食・物販ブース出展が可能ですので、何か提案ある方は高田大隅つどいの丘商店街事務局まで連絡下さい。 TEL：0192-47-4776 FAX：0192-47-4778 E-mail： tsudoinooka@gmail.com
-----------------	---

2. 講演（10:05~11:30）

➤ 『コミュニティ再建に関する取り組み～大船渡市長谷堂地域の事例から～』

◆船戸義和さん◆

岩手大学三陸復興推進機構 地域コミュニティ再建支援班。震災後、NGO として大船渡で活動。2013 年 6 月より現職でコミュニティ作り支援を行っている（大船渡、陸前高田など）。

≪地域コミュニティ支援とは≫

例えば、ある日突然自分の住んでいる地域に救急車が来た時の人々の反応に、住民の地域に対する関心や人間関係が表れる。「見に行く＝良、見に行かない＝悪」ではないが、支援

者としては人への関心を高め「見に行く人」を増やしたい。

地域コミュニティは、「居住地域を同じくし、利害を共にする共同社会（大辞泉）」つまり地域の課題解決や楽しみの共有などを担うものと考えることができる。仮設住宅では一部住民と支援員や支援者が担っていた部分も大きいですが、災害公営住宅への移行期の今、この先10年20年を見据えて、住民が自分たちでできることをやり、助け合っていく事が重要。支援者は住民自身がコミュニティ活動をするための支援に回る必要がある。

新しい暮らしではどんな人がいるのか最初はみんな様子見をしている。コミュニティが共有する「利」「害」どちらも感じる機会があるが、実は「利」を有難いという声よりも「害（負）」の発信力の方が強いことがある。お互いを知らないからこそ小さな問題が「大きな害」に感じる事もある。最初にどちらを感じるかで印象が変わり、「利」を感じるきっかけを支援者が作る必要があるのではないか？

自助共助の力を高めるには実践の積み重ね。支援者が「何かをやってあげる」ではなく「住民がやる機会を作る」。住環境が変わる今、この切替えをするのに良い時期である。

同じ地域に住んでいればコミュニティは勝手に出来る人たちもいるが、昔は個々の利害に直結する共同作業が地域の中に沢山あり、それを通じてコミュニティは自然に形成されていたものの、今は生活が個々で完結し共同作業が少ないので、支援者がコミュニティを作る仕掛けをしなくてはいけないと考えている。

《仮設住宅から災害公営住宅への移行期の課題と対応》

受入れ地域と災害公営住宅入居者の双方が不安を感じている。災害公営住宅は様々な出身地の人が集まるだけでなく、都会的な建物の見た目に違和感もあるので入居者の不安を増長。では交流会しましょうといっても、いつものお茶会の決まった人しか来ない…それを打開するために何をするのか？

【長谷堂の事例より】

顔合せの機会を市役所とタイアップで実施（役所文書には集客力があるのでまず人を集める）→参加者の中から中心人物を見つける→その人を中心にコミュニティを作っていく。最初に集まれる機会を大切にする。それが難しければ、直接の義務や利害が発生するものをテーマにする（共益費や公民館費の額など）。楽しいけれど興味がある人しか集まらないもの、沢山集まるけど楽しくないものの2つを上手く組み合わせることが重要。また、地域が災害公営住宅の住民を歓迎する意図を表す行事として歓迎会は有効。

- ・ 行政：入居者を把握しており、最初の声掛けができる唯一の存在。
- ・ 社協/支援者/NPO など：行政と協力してコミュニティ作りのソフト部分を支援できる。
- ・ 住民：サービスの受け手から、自治の担い手へ。

これまで支援者が個々に住民に支援をしていたが、これからは支援者が住民の中心人物を見つけ、その人を通じた広がりからコミュニティが出来ていくのが理想。実際に、長谷堂地域では田村さんを通じて災害公営住宅の中にさらなる中心人物ができてきた。

コミュニティ作りは時として「支援」ではなく「指導」「啓発」でもある。住民の中からコミュニティづくりを主体的に担える中心人物を見つける（育てる）。「住民に何をしてあげられるか」ではなく、「住民が何をできるか」を見つけ出すことが重要。

【DVD：長谷堂地域へようこそ】を鑑賞し長谷堂地域公民館の取り組みを紹介。災害公営住宅を単独行政区ではなく公民館地区に編入し、歓迎会を開催するなど、入居者と地域の交流を継続している。<http://bit.ly/1T5XULE>

◆田村敏夫さん◆

大船渡市長谷堂地域公民館 館長。地域公民館の視点でまちづくりを進めているほか、地域の民生委員も務めている。

《長谷堂地域公民館のこれまでの動きとキーポイント》

当初は地域に災害公営住宅が建設されることで、人や車の増加に伴う環境問題への不安が挙げられ、それを話し合うことからスタート。

2014年 コミュニティ作りの視点から、災害公営住宅の公民館地区への編入について編入検討委員会で検討を始める。元々世帯数が多く2つに分ける話も出ていたので、さらなる世帯増加に様々な意見が出された。

2015年：3月総会 「長谷堂に住む住民は地域も災害公営住宅も同じ」との考えで一致し検討委員会および公民館総会で編入を決定。併せて、震災後に大変な想いをしてきた入居者、また高齢者の方々をフォローする役割を公民館やさつき会（65歳以上の方々のグループ）とタイアップしていく必要性が話された。

6月：合同説明会 市と合同で入居者への説明会と懇談会を開催。長谷堂地域公民館の説明のほか、懇談会ではあらかじめ座長を決めグループの中に配置。話を盛り上げながら中心になれそうな人をピックアップし、その場で6人の班長と会計を決定。後の団地役員会を作る下地がここでできた。

7月：歓迎会開催 被災した方々なので、お酒を飲んで騒ぐのではなく話をしながら歓迎する意味合いで設定。18のテーブルそれぞれに座長と副座長を配置し、余興の合間に自己紹介や話が進むよう努めた。

2016年1月：餅つき交流会 災害公営住宅が2棟あり、2棟間の交流を促進するために団地役員会の中から提案。地域から杵と臼を借りた。その後、1月2月にはかなり交流ができるようになった。



団地役員会は、6月の説明会で班長を決めた後、第一回を7月に開催。組織役員の経験者がいなかったの、常に公民館役員が入ってリードしながらこれまでに8回開催。回を重ねるごとに意見がでるようになった。後半は団地内の問題（ペット、共益費、浄化槽、清掃など）を話しあえるようになり、かなり自発的に「自分達が住むところ」という視点で発言から行動までをやってきた。

また、広報誌を月1回発行している（これまでに第11号まで）。行事の呼びかけ、ルールなどの周知に寄与した。情報を交換するために役員会と広報は欠かせない取り組みだった。

《長谷堂地区災害公営住宅（長谷堂東団地）の今》

次年度の役員（班長）を選出し、2016年3月に団地自治会の発足総会を開催した。当初、団地自治会形成には数年かかると予想していたが、役員会を重ねてその必要性が話されてきた。また、班長は1年で交代し終了予定だったが、自発的に進めてきたのにこのままでいいですか？と投げかけたところ、今年度の役員のうち6名が団地自治会に残り事務局、役員、会計などを担うことになった。発足総会には入居47世帯のうち24世帯が参加。総会後に、家族を交えての夕食会も行い住民同士が交流できる工夫もした。これからは、団地自治会（新役員と残る6名の全13名体制）が団地内のコミュニケーション作りに尽力していく。公民館としても、イベントは継続していく予定。さらに、外に出てこない方々（高齢者、引きこもり、認知症）を団地の中でどのようにフォローしていくかが課題。組織的に進めて、誰もが参加できる団地にしていきたい。

◆質疑応答◆

①【田村さんへ】地域公民館がこのような動きをしていくことを、地域の方々にどのように理解してもらったのか？また、支援者からのアドバイスで良かったこと。

→公民館役員会（14～15人）で長谷堂に来る人を受入れる見解は一致したが、受入れにあたっては、更に40人くらいに輪を広げた検討委員会で話し合った。最初は半々だった意見も、全体の中で問題提起をしながら合意を重ねた。

船戸さんとは、これまでに関わりがあったわけではなく初対面からスタート。当たり前のことを理路整然と話してくれて、自分たちがやっていることは同じなんじゃないかと感じてきた。コミュニティづくりの勉強会を一緒に開催した。実際に動いたのは地域だが、この形にしようという方向性を導いてくれた。

→（船戸さん補足）まず、田村さんはじめ長谷堂地域がすごい。市とタイアップした入居説明会や歓迎会で座長を務めたのは長谷堂地域公民館の役員。田村さんが座長を割り振り、「いかに話を広げられるか」の重要性を勉強した。私たちはそのツール（4コマ（※））を提供したくらい。

※A4の紙を4分割して部屋番号、名前、出身、住んでいる棟など書いてもらい発表する。

②【お二人へ】市とのタイアップの話があったが、行政との関わりについてはどのように感じているか？

- （田村さん）行政から指導を受けた部分ややり合った部分ある。もう少し入居者や地域の生の声を聞いて欲しいとの思いもあるが、限界があるかもしれないと感じるところも。
- （船戸さん）行政が呼びかけると参加率が高い。合同説明会は行政と一緒にだからこそ上手くいった。コミュニティづくり専門の部署がない場合（どこかの部署が担当の枠を超えて踏み出したとしても）地域のことを第一に考えたサポートが難しいので、公民館の方々にとっては大変だった部分もある。入居者を把握するために田村さんは事前に団地の全戸訪問をしている。民生委員という立場もあるが、足で稼いだ点がある。本当はその辺で行政からのサポートがあると良かったかもしれない。自分たちで自治組織ができ、コミュニティで問題を解決しようという試みは、行政が苦情の矢面に立たずに建設的な話し合いでの解決につながるので持ちつ持たれつの関係となる。団地で発生するトラブルに地域が対応できることは、行政との関わり大きな部分。

③【田村さんへ】毎月開催される役員会とは団地の中の役員会のこと、そこに公民館も参加しているのか？また、歓迎会の費用はどのように確保したのか？

- そう。団地役員会には長谷堂地域公民館の三役、公民館の役員会には団地役員二人が相互に参加。団地役員会は毎月、公民館は少し無粋になっている。
- 歓迎会には 50 万円程かかった。赤い羽根共同募金の住民支え合い活動助成で 10 万円、猪川地区公民館から 10 万円、長谷堂地域公民館から約 20 万円。

地域公民館の予算から出すことに反対意見はなかったか？→問題なく進んだ。

④【船戸さんへ】この支援連絡調整会議でも自治会のような地縁型コミュニティと趣味の集まりのテーマ型のコミュニティについて話がでた。被災 3 県の事業を見るとテーマ型コミュニティの多いと感じるが、もっと地縁型のコミュニティに刺さる事業にするためには？

- テーマ型コミュニティで仲良くなることで地域や団地の課題についてポロッと出てくることがある。課題が浮き彫りになり、その課題に対しての意識が高まる時期がねらい目。「これどうにかしたい」の思いが高まった時にそれを解決するには自治会とか団地の組織がないといけませんよね？と問いかける。状況を把握しながら適切なタイミングで自治会形成を呼び掛けられる支援者という心掛けをしていると、自治会などの集まりができやすいのではないかと。テーマ型コミュニティに参加したいと思っている人は一握り。みんなが一番反応するのは実は清掃活動。清掃という身近なもので集まって、作業後にみんなでお茶っこを仕掛けると、テーマ型とそうでないものがリンクする。

⑤【船戸さんへ】これから高田でも唯一の県営団地ができる（300戸越えのマンモス）。大きな規模でのコミュニティ形成のアプローチについて上手い方法があれば教えて頂きたい。

→大きい所は一つにはまとまらないので、ある程度細切れにするのが有効。300戸であれば、50戸ずつにリーダーを置き、その中から一人自治会長を置くという構造を作るといいと思う。他方、大きいとテーマ型コミュニティは作りやすい。一握りでも30人集まることもある。大きい所への仕掛け方は、いかに沢山多様なテーマ型コミュニティを仕掛けられるかも重要。必ずその複数に参加する人がいて、彼らがキーマンとなってそれぞれのテーマの輪がつながることがある。

⑥【お二人へ】配布資料によると子どもたちが30人ほど新たに地域に入っている。子どもたちに対して取り組んできたこと、もしくは今後考えているか？

→（田村さん）長谷堂地域の子ども会に自動的に編入して一緒にやっている。公民館は直接タッチしていない。

→（船戸さん）現在行っている中では、子どもに特別アプローチしているものはない。先日の団地会総会の夕食会や餅つき交流会には子どもたちも何人も来ている。ただ子供だけを集めて何かやるには人数少ない印象。また、必ずしも全員揃わない。今は何かのイベントをやった時に子どもたちが来て、それについて親が来て、そしてつながろうというところで収まっている。

3. 活動分野毎の討議・意見交換（グループ議論）

<1G 地域・コミュニティ>

➤ 意見交換

●講師への質疑応答 ※詳細は議事録参照

- ・自治会づくりの事前準備として交流会等を繰り返す中で、中心になれる住民（田村さんのような方）を仕掛ける側が探しているが、それを仕切る役は誰がするのかという点が一つ課題として挙げた。

→地域を知っている人・地域に住む住民のことを知っている人が担うのが良い。

その役を担うのは社協でも NPO でも良いが、しっかり役割分担することが大切。

<2G 子ども・教育／女性・子育て>

➤ 意見交換

●3/17（木）に高田高校 JRC の担当の先生に挨拶をしに行くことが決定。

その際、確認したいこと・聞きたい内容について議論。

- ・今どのような活動をしているのか
- ・出来ていない活動はどのようなことがあるか

- ・一緒に出来ることはどのようなことがあるか

<ワーキンググループ>

- 「高田の復興を振り返る資料作成について」 ※資料参照
 - ・プラットフォームが行ってきた支援概況調査4年間の情報を、時系列で再編集・一覧化した資料を共有。データ版は議事録と併せて共有する。
資料の取り扱いや使い方・加工の仕方等に関して、皆さんにアンケートをとりご意見をいただきたい。他市町村が参考に出来るものにもしていければと考えている。

4. その他

- ・平成28年度「花とみどりの復興活動支援事業」公募開始のお知らせ ※チラシ参照
(大船渡地域振興センターより)

【次回の開催日程】

- ・第34回 支援連絡調整会議
4月12日(火) 10:00~12:00 ※会場及び詳細は別途連絡